

鹿の子C遺跡(石岡市)

鹿の子C遺跡は常陸風土記の丘に、鹿の子史跡公園として復元整備されている



奈良時代、蝦夷征討の武器製作の兵站基地であった鹿の子C遺跡/東北地方の平定に関連して造られた官営工房で、溝に囲まれた掘立柱建築遺構と、国内から集められた工人の住む竪穴式住居、それに作業場となった長屋状竪穴遺構が計画的に造られているのが明らかにされたと云う/説明板が立ち並ぶ



鹿の子遺跡復原(部分)にあたって

この区域は、常磐自動車道建設に伴う発掘調査で発見された、鹿の子C遺跡の一部を復原しています。

鹿の子遺跡は、漆紙文書や連房式竪穴遺構など、貴重な遺構や遺物が発見され、全国から注目されました。また、この遺跡は、出土品の内容から8世紀末から10世紀にかけて存在した集落と考えられています。

遺跡は、短期間の存在のため自然発生したものでなく、公的な計画に基づいて建設された集落とみなされています。

各遺構はⅠ～Ⅳ期にわたって重複していますが、Ⅳ期の遺構は土壌のみでした。

遺構が建設された頃の大和朝廷は、東北経営に積極的でした。この遺跡は、所在地が常陸国府に近いことや、出土品の内容からみて、国営の軍需品の製造や修理の補給基地と考えられています。

遺跡は、官衙・工房・竪穴住居等の建物跡群が、それらをとりまく溝で二つのブロックに分けられています。

官衙ブロックは、遺跡西南の平坦な部分に位置し、周囲に溝をめくらし、東側の中央に門を設けています。ブロック内の建物は掘立柱です。

工房・住居ブロックは、遺跡の東と北の緩い斜面に混在しています。遺構はすべて竪穴形式で、工房と住居の差は認められませんでした。そのため、炉跡、カマド跡の有無で各々を区別しています。

復原建物の配置は、発掘調査遺構に基づいていますが、敷地の制約で、SB-28(高床倉庫)と1号工房は、位置を移動して復原しています。

遺跡の建設された年代やその後の経過は、出土品の年代や各遺構の建築時期から、大和朝廷の東北経営の過程とよく関連しています。官衙ブロックが整備されたのは、弘仁6年(815年)の軍政改革後と考えられています。

鹿の子C遺跡が形成されたのは8世紀後半と考えられています。これらの復原建物の基準尺度は8世紀前半の1尺(295mm)を用いています。その原因は、桁・梁など8世紀前半に建設された建物の部材を転用したものと考えられるからです。

これらの建物は、奈良国立文化財研究所 宮本長二郎建造物研究室長の指導のもとに復原されました。

鹿の子遺跡は、常磐自動車道の建設に伴い、昭和54年11月から昭和57年2月までの間に、約1万7000平方メートルが発掘調査された。発掘調査により、溝で区画された中から、竪穴式住居跡69軒、連房式竪穴遺構5棟、掘立柱建物跡31棟、工房跡19基などが発見された。また、この調査で土器、墨書土器、鉄・銅製品、瓦、漆紙文書など多量の遺物が出土した。特に漆紙文書は、長岡京跡(京都府)や多賀城跡(宮城県)で出土したものより多量で、内容も出挙帳、人口集計文書、兵士自備戎具の簡閲簿など全国で初めて発見されたものもあり、奈良時代から平安時代初期にかけての行政や民衆の生活を知る上で、きわめて貴重な文書である。

鹿の子遺跡は、発見された遺構や出土品から、鉄製品を中心に製造していた国衙工房跡と考えられ、「地下の正倉院」と呼ぶにふさわしい貴重な遺跡である。

昭和60年1月 石岡市教育委員会
石岡市文化財保護審議会

(現地説明板より)

出土した漆紙文書から判読できた年号は749年～795年頃で、奈良時代から平安時代前半にかけて営まれた遺跡であり、8世紀の後半から始まった蝦夷征討の基地として重要な位置を占める国衙工房的機能を有した遺跡であったと云う



さて、その遺構を巡ってみよう

[\(クリックしてビデオを見る\)](#)

・SB- 堀立柱建物跡・SI- 竪穴式住居跡・SX- 工房

① 2号連房式竪穴遺構

この建物の、発掘調査では、遺構から炉跡1基、カマド跡4基と、漆付着土器、瓦、砥石、小札、釘、などが床面全体に出土しています。建物の用途は住居と工房を併用していたと考えられます。

② 5号連房式竪穴遺構

この建物の屋根は入母屋造り茅葺で採光と換気を回っています。
発掘調査では、遺構からカマド2基と、土器・鉄製品などが出土していますが、床面出土のものは少なく用途としては連房式の竪穴住居と考えられます。

③ SX-01・1号工房

この建物の屋根は切妻造り割板葺になっています。遺構から炉跡が7基出土している事から用途としては鍛冶工房と考えられます。

④ SI-145号

この建物は竪穴住居で、屋根は入母屋造り茅葺で、採光と換気を回っています。用途は住居と考えられます。

⑤ SB-6

この門は官衙ブロックの入口になる門で掘立柱、控柱付き瑞籬門(みずがきもん)の古い形と考えられます。

⑥ SB-16

この建物は長屋と考えられ、二戸とも屋根は寄棟造り茅葺です。壁は土塗壁、床は土間床です。用途は、武器や鉄製品などの仕上げ作業の工房と考えられます。

⑦ SB-20

SB-16と同じく屋根は寄棟造り茅葺で壁は土塗壁、床は土間床です。用途は特殊な作業棟と考えられます。



⑧ SB-11

この建物の屋根は、寄棟造り茅葺です。壁は茅壁、床は土間床です。発掘調査では、遺構から土器・瓦片などが出土していますが、位置や規模からみて建物の用途は官衙ブロックの管理棟と考えられます。

⑨ SB-10

この建物の屋根は切妻造り割板葺です。壁は竪羽目板壁、床は土間床になっています。用途は、倉庫と考えられます。

⑩ SB-9

この建物の発掘調査では遺構の柱穴から土器片、瓦、刀子片などが出土しています。この建物は、武器や鉄製品の仕上げなどの作業に使用されたと考えられます。

⑪ SB-28

この建物は、独立した掘立柱が床を支えた高床式倉庫です。
屋根は切妻造り厚板流れ葺で、厚板の接ぎ目に目板を打っています。この建物の用途は、官衙の貴重品を収納していた倉庫と考えられます。

⑫ SB-5

復元した建物の中ではこの建物だけが椽持柱で棟木を支えています。
屋根は切妻造り割板葺で壁は板壁、床は土間床です。
建物の用途は、工場の製品の整理や仕上げなどの作業場と考えられます。

⑬ SB-4

この建物の屋根は切妻造り割板葺です。壁はたて板壁、床は土間床になっています。用途は倉庫と考えられます。

① 2号連房式竪穴遺構



2号 連房式竪穴遺構

この建物は、地表面を東西22.124m、南北4.276mの隅丸長方形に掘り下げて床面とし、内部に東西6間、南北1間の規模で主柱が建ち、屋根を支えています。屋根は入母屋造り茅葺で、採光と換気を図っています。

発掘調査では、遺構から炉跡1基、カマド跡4基と、墨書土器、漆付着土器、瓦、羽口、砥石、小札、釘、鋼滓などが床面全体に出土しています。

建物の用途は、住宅と工房を併用したと考えられます。

竪穴式建物でこんなに長いのは珍しい・・・



内部の様子

[\(クリックしてビデオを見る\)](#)



② 5号連房式竪穴遺構



5号 連房式竪穴遺構

この建物は、地表面を東西9.439m、南北4.276mの隅丸長方形に掘り下げて床面とし、内部に東西2間、南北1間の規模で主柱6本と棟持柱2本が建ち、屋根を支えています。屋根は入母屋造りの萱葺で、採光と換気を図っています。

発掘調査では、遺構からカマド跡2基と、土器、瓦、羽口、砥石、鉄製品、銅滓などが出土していますが、床面出土のものは少なく、建物の用途は、連房式の竪穴住宅と考えられます。

③ SX-01・1号工房



SX-01・1号工房

この建物は、鹿の子C遺跡の東側で発見された遺構を基に、この区域内に復原しました。発見時の遺構は東西方向で南面していましたが、復原では、敷地の制約で南北方向で西面しています。

規模は桁行8間(23.6m)、梁間3間(5.90m)で、背面の1間は下屋にし、切妻造り割板葺の屋根を葺き下しています。梁間の柱間は、両妻とも同じですが、桁行の柱間は正面と背面で異なります。

この建物は、内部の棟持柱3本で棟木を支える梁の無い構造です。壁は両側面と背面が板壁ですが、正面は開放されています。

床面は、正面寄りの南北23.0m、東西4.0mが掘り下げられ、残りは旧地盤の高さになり、その部分に炉が7基あります。

建物の用途は、織造工房と考えられます。

④ SI-145号



SI-145号

この建物は、主軸が真北を指す^{しゅうじく}竪穴住居^{たてあなじゅうきょ}で地表面を東西5.014m、南北4.719mに掘り下げ床面とし、主柱が4本建ち、屋根を支えています。屋根は入母屋造り茅葺^{いりもやづく}で、採光と換気を図っています。南面中央に出入口、内部北面中央にカマドがあります。

発掘調査では、覆土から土器、硯^{すずり}、瓦、羽口、鉄製品、鉋^{こぎ}滓^{さい}が出土していますが、建物の用途は、住居と考えられます。

⑫ SB-5号



SB - 5

この建物は、桁行3間（6.49 m）、梁間2間（3.835 m）の主屋に、東側に1間（2.36 m）の庇が付いた掘立柱の建物で、屋根は切妻造り割板葺です。壁は板壁、床は主屋、庇とも土間床です。

復原した建物の中では、この建物だけが棟持柱で棟木を支えています。

発掘調査では、遺構から瓦、砥石、鉾滓などが出土しています。

建物の用途は、工房の製品の整理や仕上げなどの作業場と考えられます。

⑬ SB-4号



SB - 4

この建物は、桁行8間（23.6m）、梁間3間（6.195m）の規模で、柱は掘立柱、屋根は切妻造り割板葺です。壁はたて板壁、床は土間床になっています。

柱間寸法は、桁行1間・10尺、梁間1間・7尺です。

発掘調査では、遺構から土器以外に羽口、鉾滓、小札の束、釘などが出土しています。

建物の用途は倉庫と考えられます。

「鉾滓」鉾石から金属を製錬する際にでる滓

「小札」鎧の材料の鉄の小板

⑪ SB-28号

これは高床式倉庫



SB - 28

この建物は、独立の掘立柱が床を支えた高床式倉庫です。
規模は、桁行3間（7.375m）、梁間2間（4.425m）で、
屋根は切妻造り厚板流れ葺で、厚板の接ぎ目に目板を打っています。
外壁は横板壁の外側に竹綱代を押え、床は床板でその上から
棟持柱が1本建ち棟木を支え、屋根の転倒を防いでいます。
建物の用途は、官衙の貴重品を収納していた倉庫と考えられます。

⑨ SB-10号



SB-10

この建物は、発掘調査で桁行6間まで確認されましたが、それ以上の調査は区域外のため出来ませんでした。

復元では、桁行7間(16.077m)、梁間3間(5.605m)の規模とし、柱は掘立柱、屋根は切妻造り割板葺です。壁は堅羽目板壁、床は土間床になっています。

発掘調査では、遺構から土器片、瓦、鋼滓などが出土していますが、建物の用途は、倉庫と考えられます。

⑩ SB-9号



SB - 9

この建物は、桁行3間（7.67 m）、梁間2間（4.72 m）の規模で、柱は掘立柱、屋根は寄棟造り茅葺です。壁は土塗壁、床は土間床（一部竹すの子敷）です。

柱間寸法は、桁行の両端が1間・9尺、中央と梁間は1間・8尺ずつです。

発掘調査では、遺構の柱穴から土器片、瓦、羽口、鉋滓、刀子片などが出土しています。

この建物は、武具や鉄製品の仕上げなどの作業に使用されたと考えられます。

⑧ SB-11号



劣化していて良く読めない



⑦ SB-20号



SB-20

この建物は、桁行5間（10.03m）、梁間2間（4.72m）の規模で、柱は掘立柱、屋根は寄棟造り茅葺です。壁は土塗壁、床は土間床（一部竹すの子敷）です。

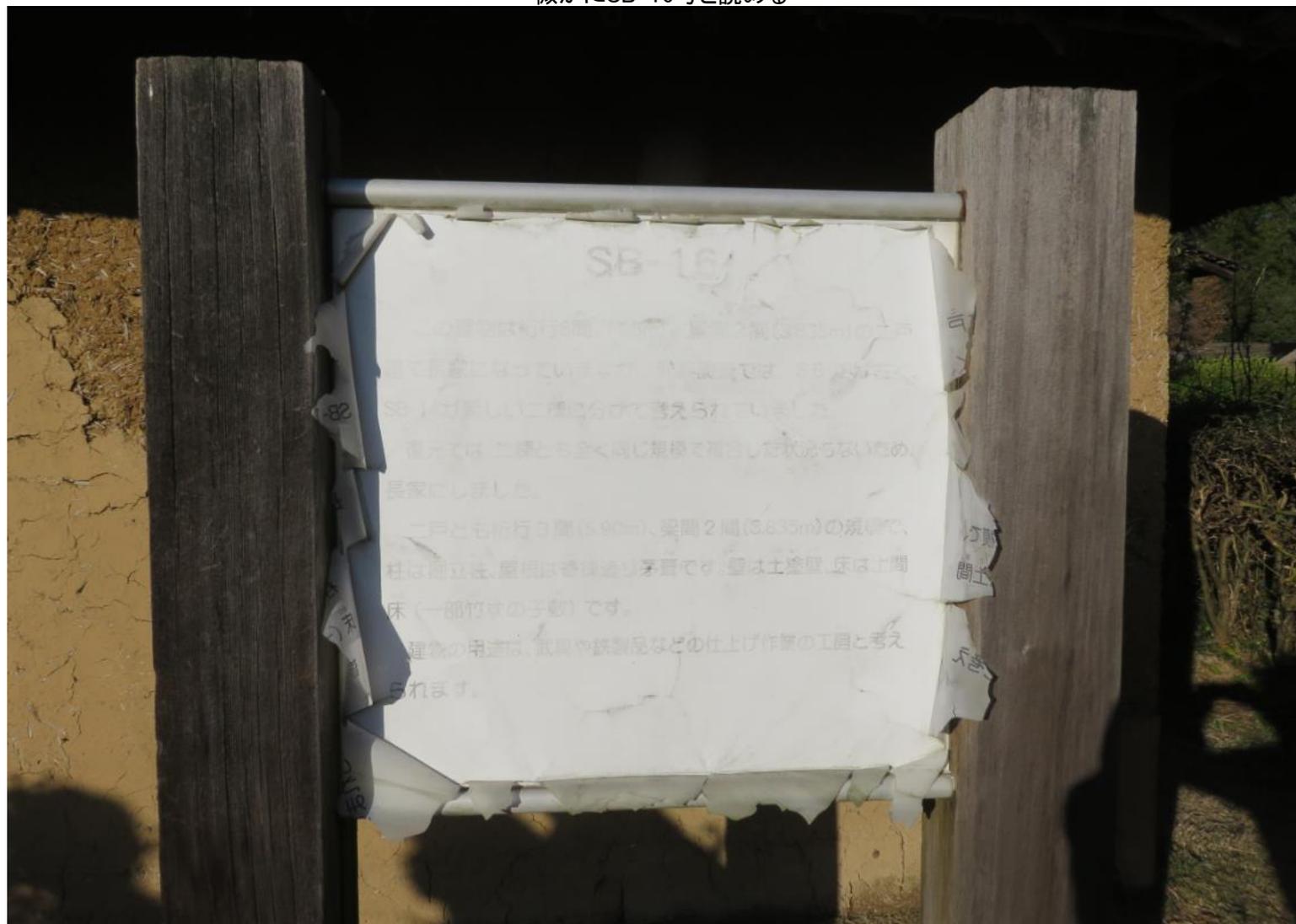
柱間寸法は、桁行の中央1間6尺、それ以外は1間7尺ずつ、梁間は1間8尺です。

官衙ブロック内の建物のうち、SB-20とSB-16の二つの柱は、ほかの建物に比べて細く、出土品の少ないことや、土塗壁などから、これらの建物の用途は、特殊な作業棟と考えられます。

⑥ SB-16号



微かにSB-16号と読める



SB-16

この建物は約行3間(4.90m)、梁間2間(5.835m)の規模で、
柱は地立柱、屋根は香茅葺り茅葺です。壁は土塗壁、床は土間
床(一部竹すの子藪)です。

建物の用途は、武器や鉄製品などの仕上げ作業の工房と考え
られます。

二戸とも約行3間(4.90m)、梁間2間(5.835m)の規模で、
柱は地立柱、屋根は香茅葺り茅葺です。壁は土塗壁、床は土間
床(一部竹すの子藪)です。

建物の用途は、武器や鉄製品などの仕上げ作業の工房と考え
られます。

⑤ SB-6号

官衙ブロックの入口になる瑞籬門

[\(クリックしてビデオを見る\)](#)



SB-6

この門は官衙かんがブロックの入口になる門で掘立柱ほったてばしら、
控柱ひかえばしらつ付き瑞籬門みずがきもんの古い形と考えられます。

◎官衙かんがブロック(8棟)

遺跡西南の平坦な部分に位置し、周囲に溝をめぐらし東側の中央に門を設けています。ブロック内の建物は掘立柱です。

傍には古代家屋復元広場もあった

[\(クリックしてビデオを見る\)](#)

:: 古代人の住居



縄文時代住居



弥生時代住居

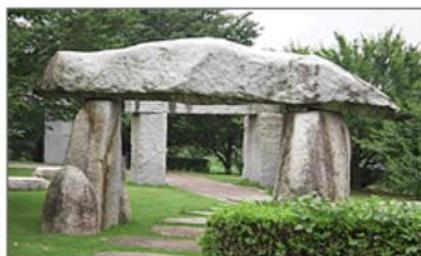
:: 中世の民家



鎌倉時代



奈良・平安時代



時の門

:: 近世の民家



曲屋 (まがりや)



直屋 (すこや)

江戸時代後期の曲屋・直屋をモデルに建築したものです。冬の厳しい県北地方には、曲屋が多く見られ、比較的暖かい県南地方には、寄せ棟の直屋が多く見られます。

縄文時代住居





縄文時代住居 (竪穴式住居)

竪穴式住居(たてあなしきじゅうきょ)

地面を円形や方形に掘り窪め、その中に複数の柱を建て、梁や垂木をつなぎあわせて家の骨組みを作り、その上から土、葦などの植物で屋根を葺いた建物のことをいう。なお、「竪穴住居」と表記することもある。

歴史

縄文時代には盛んに造られ、のちの弥生時代に伝わり、伏屋式が主流で、壁立式は拠点集落の大形住居に限られ、首長居館として権威を示す形式として弥生・古墳の両時代に築造されたと考えられている。そして、日本の農家や民家のもととなっていった。



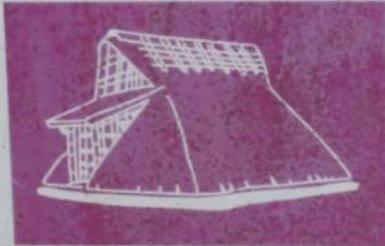


縄文時代住居 (竪穴式住居)

約 10,000 年前、日本列島は少しずつ暖かくなり、地表はシイなどの照葉樹でおおわれました。さらに土器や石器などの道具が発見され、人々は食料の確保や加工がより楽になりました。この建物は、宮平遺跡から発見された 1 号住居跡をモデルに建築したものです。宮平遺跡は、縄文時代の最も発達した約 4,000 年前の集落跡です。

弥生時代住居





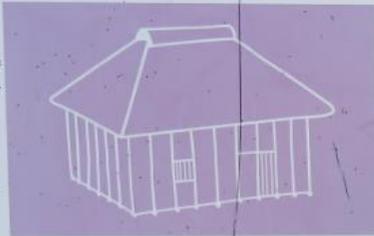
弥生時代住居

(竪穴式住居)

稲を育て収穫するという稲作農耕の技術が大陸から日本に伝わったのは約 2,300 年前の弥生時代のことです。米は収穫後長い間蓄積できるため、縄文時代に比べ安定した食料の確保を可能にしました。

奈良・平安時代住居





奈良・平安時代

この民家は現存する最も古い民家である兵庫県の箱木家の間取りをモデルに、建築しました。この住宅は、当時の農家と比較した時、相当大きな規模で、当時の農民層では身分の高い名主の住まいです。

鎌倉時代住居





鎌倉時代

この民家の頂までの高さは 8.9m、軒下までの高さは 3.6m です。茅かやや麦あわらわらで厚く被った草くさ葺ぶきの大屋根は夏の暑さや冬の寒さから人々を守ってくれます。屋根は茅かや葺ぶきで 30~40 年、麦あわら屋根は 10 年くらいで葺ぶき替えをします。

江戸時代住居





直屋 すごや

冬の寒さがきびしい県北地方には、曲屋が多く見られ、比較的暖かい県南地方には、寄せ棟の直屋が多くみられます。この民家は、江戸時代後期の直屋をモデルに建築したものです。囲炉裏には真上から「カギツルシ」をつるし、これに鉄びんや鍋をかけて煮炊きをします。炉ばたでは、食事をしたり客をもてなしたり、仕事をしたりします。



[\(クリックしてビデオを見る\)](#)



曲屋 まがりや

この民家は江戸時代後期の曲屋をモデルに建築したものです。障子や襖をはずすと大きな空間になり冠婚葬祭などの集まりにも利用されます。また、馬や牛は重要な労働力ですので、突出した馬屋と呼ばれる部分に飼われ、家族同様に大切に扱われていました。

その一角には「地藏窪貝塚」が復元されていた



じぞうくぼかいづか

地蔵窪貝塚

石岡市三村地蔵窪 1572 番地の 3 外

地蔵窪貝塚は、食糧として採集した貝を食べたあと、不要となった貝殻を投棄した結果できあがったものです。

地蔵窪貝塚を構成する主要な貝は、ハマグリとマガキで、他にオキシジミ、シオフキなど多くの種類の貝を食糧としていました。

またエイやサメの歯、クロダイのあごの骨、キジ、イノシシ、タヌキ、シカなどが見つかっています。

さらに生活用具としては、縄文土器、石皿、石斧、石鏃などの石器や骨角器が発見されており、縄文時代の生活の一端を窺い知ることができます。

この貝塚は、地蔵窪貝塚で発掘採集した貝殻で復原したものです。

さて、ここはその手前にある展示館

[\(クリックしてビデオを見る\)](#)



鹿の子遺跡に関する展示があった

鹿の子遺跡 —官営工房—

鹿の子遺跡は、鉄を中心とした大規模な官営工房跡と考えられており、特殊な構造を備えた建物跡が発見されています。また、漆紙文書の数も、全国でも一番多く見つかっており、その内容も大変重要な資料となるものです。



鹿の子遺跡全景

鹿の子遺跡

石岡市新松三丁目9982番地外

鹿の子遺跡から発掘された建物跡は、居住グループ・工房グループ（鉄製品や銅製品を作った作業場）・官営グループ（役所的な機能を持つ所）の三つのグループに分かれており、この遺跡は鉄製品を中心に製造していた常陸国の官営工房跡と考えられています。

発見された漆紙文書（漆を入れた容器のふた紙に使用された文書）は、奈良時代から平安時代初期（8世紀から9世紀）の役所や庶民の生活を知る上で貴重なものです。

鹿の子遺跡

石岡市若松三丁目8982番地外

鹿の子遺跡から発掘された建物跡は、居住グループ・工房グループ（鉄製品や銅製品を作った作業場）・官衙グループ（役所的な機能を持つ所）の三つのグループに分かれており、この遺跡は鉄製品を中心に製造していた常陸国の官営工房跡と考えられています。

発見された漆紙文書（漆を入れた容器のふた紙に使用された文書）は、奈良時代から平安時代初期（8世紀から9世紀）の役所や庶民の生活を知る上で貴重なものです。

鹿の子遺跡全景



鹿の子遺跡全景

これが漆紙文書



舟塚山古墳に関する展示もあった

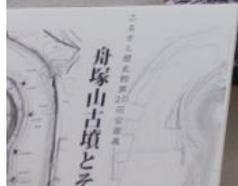
国指定史跡

舟塚山古墳

石岡市大字北根本597番地外
大正10年3月3日 指定

舟塚山古墳の墳丘（土を盛り上げた部分）の全長は、約186メートル、県内最大の大きさ（東日本第二位）の前方後円墳です。また、墳丘は三段に造られ、その形などから大阪府にある仁徳天皇陵（日本一の大きさ）に共通する特長をもっています。最近の研究結果により、舟塚山古墳は5世紀の中頃（約1550年前）に造られた大家族の墓であると言われています。

舟塚山古墳の陪家（巨大古墳の周りには古墳）からは木の棺が発見され、よろい・刀・盾などが見つかっています。



石岡の巨大古墳

石岡市内には、舟塚山古墳の他に府中愛宕山古墳（県指定史跡）と要害山一号墳の二墓の巨大古墳があります。いずれも古代石岡の有力な豪族の墓だと考えられており、舟塚山古墳の謎を解明する手掛かりとなる重要な古墳です。



さて、展示館を出ると近くにこんなものが・・・

[\(クリックしてビデオを見る\)](#)



正面は駐車場の近くにある旧内田家長屋門



江戸時代後期の建物らしい/奥の建物は旧坂家住宅(同じく江戸時代後期)





旧内田家 長屋門

長屋門は、武士や格式ある名主や豪商の屋敷入り口に設けられた門です。この長屋門の旧所有者も、江戸時代に造り酒屋を営んでいた豪商です。

間口16間という規模で主要材にけやきや松丸太などの良材を使用しています。長屋門は所有者の風格をしめす建造物といえます。

旧所有者 内田 利明 (稲敷市 ※旧新利根村)
規 模 間口 29.24m (約18間)
奥行 5.46m (約 3間)

建造時代 江戸時代 後期

これは前方右手に鹿の子史跡公園のエリアを見たところ

[\(クリックしてビデオを見る\)](#)



そこで後ろを振り向くと、染谷古墳群と記された表示板と説明板が目に入った



劣化していて良く読めない……



そこで右手を見ると、もろ古墳が・・・/円墳のようだ



その古墳の左手を少し奥に入ってみる



すぐに左手に古墳がある/7世紀代の築造と云うが・・・



右手を見るとここにも古墳がある/まだ奥にもありそうだったが、時間切れでここまで・・・



参考ホームページ

<http://www.rekishinosato.com/kanoko.htm>

<http://www.ibaraki-maibun.org/05koza/iseki-10.htm>

<https://www.edu.pref.ibaraki.jp/board/bunkazai/ken/rekishi/8-5/8-5.html>

<https://kzusankm2.exblog.jp/27635778/>

<https://massneko.hatenablog.com/entry/2015/05/03/100000>

<https://ankenna.blog.fc2.com/blog-entry-323.html>

<http://kofunnomori.web.fc2.com/ibaraki/isioka/someya.htm>

<http://gansonekodarake.blog104.fc2.com/blog-entry-554.html?sp>

http://www.rekishinosato.com/fudoki_2.htm

<https://ameblo.jp/kakitabetaine/entry-12539592224.html>

